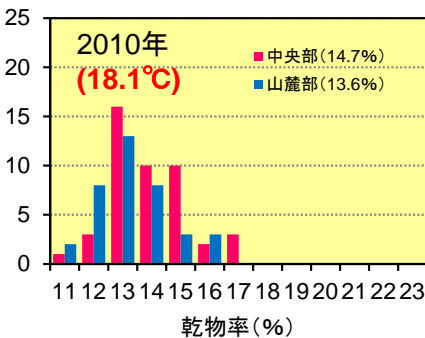
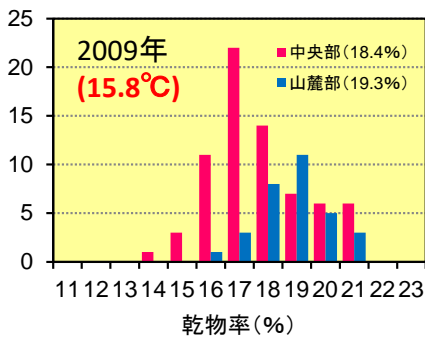
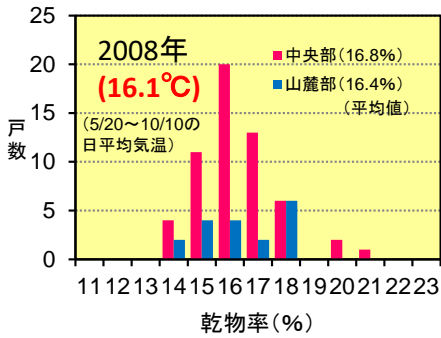


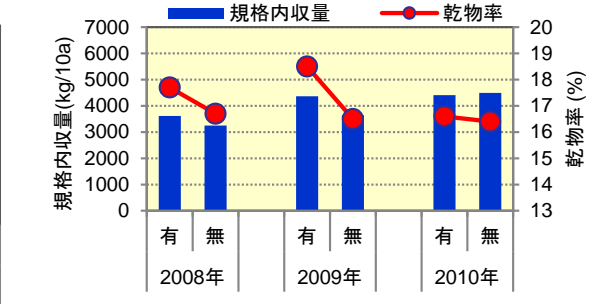
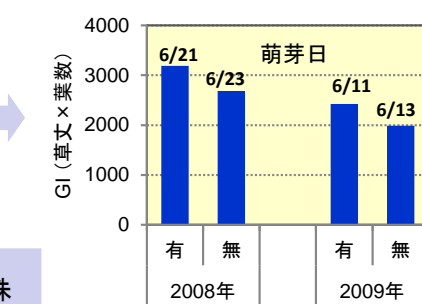
ながいもの乾物率向上に向けた栽培法

十勝の名産であるながいもでは、乾物率が低いことに起因する貯蔵性の悪化や食味の低下が問題となる場面が散見されました。そこで、乾物率の実態と改善対策について検討しました。



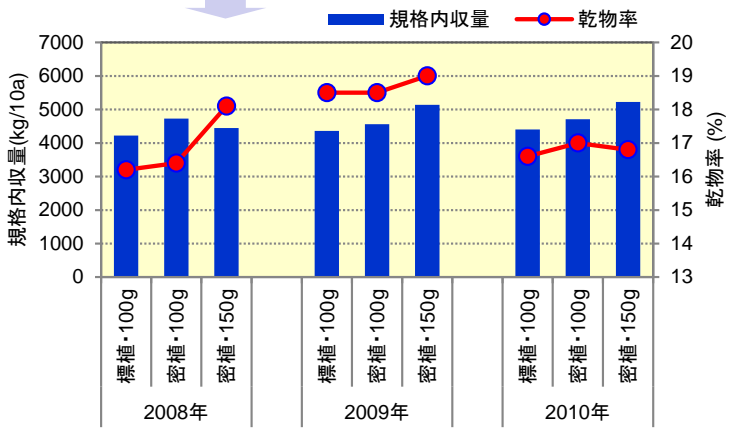
・各年とも乾物率の高低差は大。
 ・中央地域と比較して山麓地域の年次変動が大。
 ・3カ年とも低乾物率の生産者が両地域にあり。

マルチ栽培をすると初期生育が促進され、収量、乾物率とも高まります。

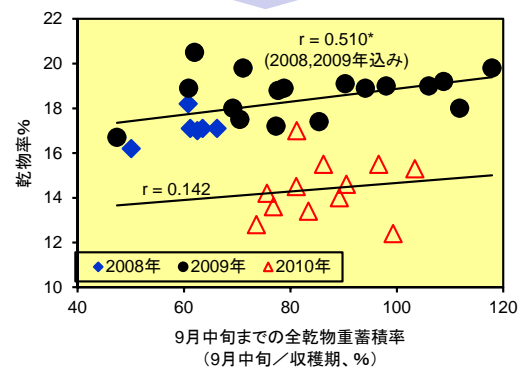


マルチの有無による 6月30日の生育(左)と収量、乾物率(右)

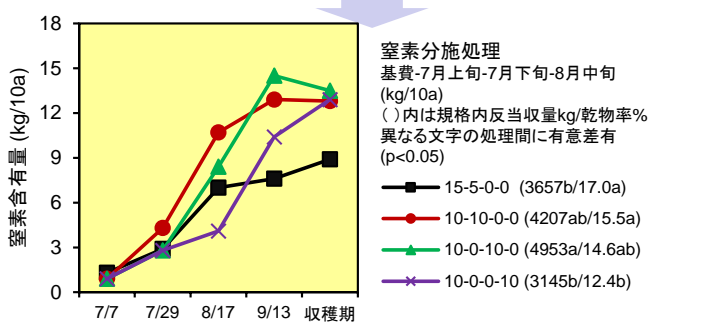
種いも重を100gから150gにして密植(株間18cm×畝間90cm)すると、収量性が高まり、乾物率も改善する傾向でした。



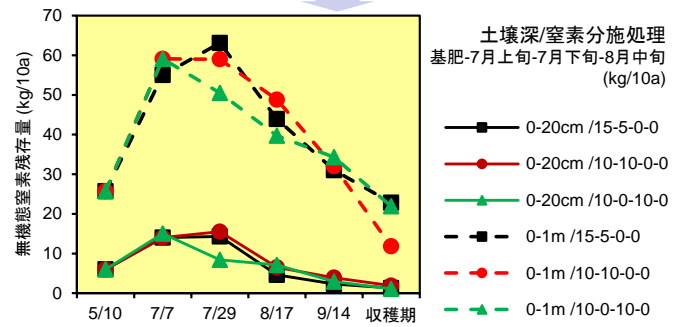
9月中旬までに十分な乾物蓄積を行っておくことが、乾物率向上に重要です。



ながいもは、7月下旬から9月中旬にかけて、急激に窒素を吸収します。つまりこの時期の窒素供給が重要です。



ながいもが吸収利用できる表層20cmの窒素は、9月中旬には極少なくなります。(ただし下層には多量に蓄積しています)。



特に低乾物率となりやすい地帯、生産者において**規格内収量の確保+乾物率の安定的向上**を図るためには・・・

- 大きい種いもの利用と密植の組み合わせ
- マルチの活用
- 植え付け遅れの回避
- 窒素分施 (基肥10kg+7月末までの追肥10kg/10a)